

日中エピソード文における結束性と主題の展開

林 雅 芬

Abstract

We investigated distributions of the kinds of cohesive relationships realized by aboutness-topic and Halliday's topical theme in Japanese and Chinese episodic texts. Topical theme and aboutness-topic have a close relationship to each other, but we found significant differences between Japanese and Chinese texts as regards the kinds of cohesion achieved by those two functional elements. First, there are more "synonymy/collocation" and "reference" relationships occurred in Japanese topical theme, but there are more cases of "repetition" and "non-cohesion" found in Chinese topical theme. Second, the top two kinds of cohesion carried by Japanese aboutness-topic are "connotation" and "synonymy/collocation", but in the case of Chinese aboutness-topic are "ellipsis" and "repetition". Consequently, it is found out that aboutness-topic tends to assume a function of linking clauses as a sentence more frequently in Chinese than in Japanese.

キーワード 結束性 話題的主题 aboutness 主題

1 はじめ

文章展開に関する研究は従来単一言語を対象とするものが多く、言語間の異同を取り上げるものが少ない。しかし、母国語の文章と外国語の文章とは何らかの違いがあることは、多くの外国語学習者が漠然と実感しているのである¹⁾。日本語と中国語の文章との相違を解明するという大きな目標に向かい、小論は日中両言語に対して、その文章の展開に関わる結束性と主題との相互関係を考察する。

2 主題・結束性と文章の展開

文章は、文章論でいう「意味の統一性」と「形態の完結性」、機能文法でいう「結束性」と「首尾一貫性」を備えて初めて成立するものである(永野 1986、Halliday 1994)。両者の学説の枠組みは必ずしも一致するわけではないが、文章内部の意味・形態上の相互作用は文章の成立を左右すると主張するところに共通する。

「意味の統一性」は、「主題と題材とに支えられた文脈 文の連接展開 」によって保証される（永野 1986：72）。結束性は主題構造と共にテキストをたらしめ、テキストの主題の選択はテキストの展開を構成する（Halliday 1994：61、334）²⁾。主題と結束性は、文章を一つのまとまりとして展開させるには、大きな役割を果たすのである³⁾。

2-1 主題の定義

「主題」は文章の主題、「topic-comment」の topic、「theme-rheme」の theme などのように、使用領域及び定義が多種多様である⁴⁾。永野（1986：69）は主題を「～について」（aboutness）と捉え、文章の主題を「文章の中で述べようとする（または、述べられている）中心的な事柄の謂れ」と説明している。aboutness の主題は文章においてどのように振る舞い、文においてはどのような位置に具現化され、又はどのように明示されていないのが問題となる。

一方、Halliday（1994：52）は「topic-comment」の topic との一致が多いことに基づき、節頭に位置する経験構成的要素を話題的主题（topical theme、節をメッセージとしてみる場合は「経験構成的主題」）と命名し、その前に、「テキスト的主题」「対人関係的主题」が先行すると想定している。ハリデー（Halliday）の主題は英語の性質に即するため、他の言語に当てはめるには限界がある⁵⁾。しかし、文章が継続的なものであり、ある要素が文頭に来ること自体は、それなりの機能と意義がある⁶⁾。

以下、aboutness の主題とハリデーの話題的主题との相互関係を探り、話題がいかに節レベル・文レベルに具現化され、さらにどのように文章へと展開していくのかを解明する。

2-2 節頭位置重視の主題と aboutness 主題

ハリデーの話題的主题（経験構成的主題）と、aboutness 定義の主題は完全に重なるわけではない。(1) 有題文及び (2) 所謂略題文では、話題的主题と aboutness の主題は一致している。しかし、(3) のような無題文においては、両者の違いが歴然である。

(1) 彼は大学1年生だ。〔話題的主题 = aboutness 主題：彼〕

(2) 彼は大学1年生だ。 ø 新しい環境に一生懸命溶け込もうとしている。

〔省略された話題的主题 = 省略された aboutness 主題 = (彼は) 〕

(3) 雨が降ってきた。(話題的主题：雨 aboutness 主題：雨が降ってきたという現象)

次の (4) に相当する (5) は、“There’s a fire!” の省略とされ、題述のみの節とハリデーに見なされている。しかし (4) はもともと主語がない文（ハリデーの「節」）である。主語が存在しない以上、英語の「subject + predicate」の節の枠組みに当てはめて言える「省略された話題的主题」も存在しないはずである⁷⁾。

(4) “火事だ！”

(5) “Fire, fire!” (Halliday 1994:63 fig 3-22 より)

(6) は文章の最初の文である。ø の位置には、「それは」「あの体験は」「あの事は」...のように、明確な「省略された話題的主題」の候補が想定できない。

(6) (文章の最初の文) ø 何年も前のことでした。【日1第1集】

省略された話題的主題という設定は、英語以外の言語に応用する際に、必ずしも妥当ではない。そのため、本稿は、ハリデーの話題的主題を、言語形式として具現化された最初の経験構成的概念を担う構成要素と、定義の範囲を縮小したい⁸⁾。

2-3 統語論的主題と語用論的主題

aboutness の主題は、日本語の文レベルでは主題標識の代表である「ハ」で示されることが多いが、前後の文脈を眺めた場合、そのような主題標識「ハ」がなくても、aboutness の主題は認められる。(7) の aboutness の主題は明示された「彼」であり、(7) は明示されていない「彼」である。(8) のようないわゆる現象文でも、主題標識を伴わない「雨」が ~ の aboutness 主題となっている。

(7) 彼は久しぶりに東京に行った。 ø 混雑の駅で、湧いてくる人ごみに戸惑った。

(8) 雨が降っている。 ぱらぱらと蓮の葉に落ち、 地面に染め込んでいく。

(9) の aboutness 主題は明示されていない「私」、 は明示されていない「東京」、 は主題標識を伴う「生活のテンポ」となっている。 と はさらに一つのまとまりを成し、「東京」について描いている。 ~ の全体的な文脈を考慮すれば、 は と を導き出し、 ~ は「東京」について述べられている文となったのである。

(9) 久しぶりに東京に行った。 相変わらず人ごみで混雑し、 生活のテンポは息を詰まらせるほどであった。

(9) のように、aboutness 主題は、その指示対象を文内、文より大きい文段に求めることができる⁹⁾。一つの文の主題のみならず、前後の文脈をも考慮するので、語用論的主題とも言える。

一方、ハリデーの話題的主題は、その節で述べられることがらの出発点となるが、必ずしも書き手が伝えようとする事柄の中心的な部分ということではない。しかし、節頭要素という統語論的な性格から、話題的主題に着目すれば、節が統語的にどのように展開されるかが窺える。話題的主題と aboutness 主題との対応の非必然性は、思考の流れがどのように言語化されるのかを示せる。そのため、両者を日中文章の相違を解明する一つ試みとして取り上げる。

用語の上でこの二種類の主題を区別しておく必要がある。統語論的な性格が深く、節頭位置が重視されるハリデーの話題的主題を「シーム」と略する。語用論的な特徴に富む aboutness 主題を「トピック」と略称する¹⁰⁾。節頭に生起する構成要素かどうかを問わず、そして、「ハ」

のような主題標識を伴うかどうかをも関係なく、言語形式として具現化された「トピック」を「形態トピック」と名づける。

シームとトピックは必然的に一致するわけではなく、トピックも必ずしも言語形式として具現化するというのではない。文章及びその下位単位で触れられるトピックの規模は文脈の流れによって異なるので、本稿では最小文段のトピック（最も小さい文段におけるトピック）のみを扱う。また、類似する題材の日本語と中国語の文章を取り上げるため、文章全体のトピックにおける日中の異同は分析しない¹¹⁾。

2-4 結束性と主題

Halliday (1994 : 309-339) は英語の結束性を作り出す方法として、「照応、省略・代用、接続、語彙的結束性（繰り返し、同義関係、コロケーション）」を挙げている。結束性は首尾一貫性とともて文章たらしめる条件とされる。一方、永野 (1986 : 104-105) は、接続関係を示す言語形式として、接続語句、指示語、助詞・助動詞、同語反覆・言い換え・応答詞などの項目を記している。

「接続」、「接続語句」、「助詞・助動詞」、「応答詞」は、文章の話題の論理展開に関わるが、直接話題の形成には関与しないため、小論の観察対象から排除される。以下、ハリデーの結束性を中心に、シームとトピックに対して、次表のような結束性の項目を考察する¹²⁾。

	繰り返し	照応	関連語句	省略	暗示
シーム				×	×
形態トピック					×
トピック	×	×	×	×	

繰り返し：屈折変化とは関係なく、同一指示対象を表す構成要素は、二度以上に現れた場合、

「繰り返し」と見なす。例えば、「行く」と「行った」、「座ってください」と「座らせていただく」を広義的に「繰り返し」の例とみなす。「彼は」、「彼が」、「彼に」、「彼を」、「彼も」を「彼」の「繰り返し」と判断する。

照応：前方照応と後方照応のみを調査する。外部照応は会話の場面に現れるが、文章の展開に直接貢献度が低いため、普通名詞として扱う。指示詞・人称代名詞の繰り返しは照応と見なさず、繰り返しのみとして統計する。

関連語句：言語形式或いは意味合いの上で、同義関係とコロケーションの関係にある語彙項目。

省略：トピックはある節 A に言語形式として明示されないが、同一文の先行する節には言語形式として明示された場合、節 A に対して形態トピックの省略を認める。(10) は形態トピック の「彼は」を省略している。

(10) 彼は大学1年生で、 一生懸命新しい環境に溶け込もうとしている。

暗示：ある文においては形態トピック又はその省略が見つからない場合、つまり形態トピック

が言語形式として提示されていない、もしくは他の文に存在する場合である。(2) のトピックは の形態トピック「彼」にて暗示されている。

(2) 彼は大学1年生だ。 ◦新しい環境に一生懸命溶け込もうとしている。

日中エピソード文における主題の異同を測定するため、シームとトピックの意味内容を以下の6種類と想定する。

だれ いつ どこ なに (何物・何事) なぜ いか (どのように)

分析の判断基準に関して、トピックは文型「節 A は～について述べられているのである」を用いてテストする。シームは、従属節・等位節・主節に対して、その最初の経験構成的概念を担う構成要素を認める。連体修飾節・埋め込み節の内部に対しては認めない。トピックは、必ずしもシームと重なるわけではない。

結束性の判断は、指示対象の同一性を重視する。「繰り返し 照応 省略 関連語句 暗示」の順番で結束性の候補を選択する。(11) の は を前方照応し、 は の一部を繰り返し、 は を繰り返し、 は の一部を繰り返している。また、(12) の はそれぞれ の前方照応と の繰り返し、 は の前方照応に当る。

(11) 私と友人は…。 私たちは、…。 友人は…。 私たちは…。 私は…。

(12) おじさんは…。 彼は…。 おじさんは…。 彼は…。 (いずれも同一指示対象)

また、結束性を判断するとき、まず名詞句の主要部に着目し、それに結束性が見出せない場合、次に修飾部の結束性を考える。(13) の下線部は前の文の「温かな気持ち」の「気持ち」の繰り返しであり、「感謝の気持ち」は「温かな気持ち」の関連語句として扱わない。(14) の「頭」と「容体」の間に「関連語句」という結束性が生じると見なし、「娘の容体」を「娘の頭」の「繰り返し」として認めない。

(13) ...雪で埋もれた車の中でも、私たちは温かな気持ちでいっぱいでした。そして感謝の気持ちは今も心にいっぱいです。【日3 第5集】

(14)「お大事にね」と娘の頭をなでて帰られた。心残りだったが感謝の言葉だけで別れた。一時間くらいで娘の容体も落ち着いた。【日9 第1集】

しかし、(15) 下線部のようなコソア系の指示成分を持つ要素は、先行する文の「男性」を前方照応すると認め、「繰り返し」とは見なさない。

(15) 男性は声をかけた。その男性は～と言った。

2-5 分析の材料

以上の項目と基準に基づき、結束性の分布、シームとトピックとの関わりをめぐり、日本語と中国語のエピソード文を考察する。

従来、研究材料は翻訳文や外国語学習者による作文が多かった。それに反して、ここでは題

材が類似する母国語話者による文章を取り上げることとする。日常生活で思いもよらぬところを親切にしてもらった経験を綴った記述文、日中各 25 編である。何れもあるエピソードを中心に記述した文章であるため、本稿はそれをエピソード文と称する。出所は以下の通りである。

日本語の言語材料：『涙が出るほどいい話』1996、第 2 集 1997、第 3 集 1998、第 5 集 2000 社団法人「小さな親切」運動本部、河出書房新社

中国語の言語材料：『溫馨小品』第 2 集 1997.1、第 3 集 1997.12、第 6 集 1999.3、第 7 集 1999.7、第 8 集 1999.10、第 9 集 2000.4、第 10 集 2000.8、第 11 集 2001.6 玫瑰工作小組、精美出版股份有限公司

なお、記述を簡潔化するため、日本語を JP、中国語を CH と略することがある。

3 考察

本稿は、結束性が文章における主題の展開に対する関与を注目し、統語論的主题である「シーム」と、語用論的主题である「トピック」との関わりを分析する。「シーム」に見出される結束性の言語手段は統語的に節を展開し、「トピック」の結束性は語用論的に文章の大小のトピックを展開させる働きがあると仮定する。

3-1 節の分布と主題の意味内容

今回取り上げた分析材料のエピソード文は、日本語と中国語それぞれ 25 編となる。JP25 編は文 314・節 595 から構成されており、文の平均の長さは 1.9 節となっている。CH25 編は 528 文、1646 節、文の平均長さは 3.1 節である。文頭の節と文頭でない節（文中節）との比率は、JP が 53%対 47%、CH が 32%対 68%となっている。中国語の一つの文は日本語と比べて、より多い節から形成されたのである。

CH のシーム・トピック一致の比率 (41.4%) は、JP の 37.8%を上回り、中国語のトピックが比較的節頭に生じやすいことが推測できる (図 1 を参照)。

図 1 シーム・トピックの意味合い：一致する場合

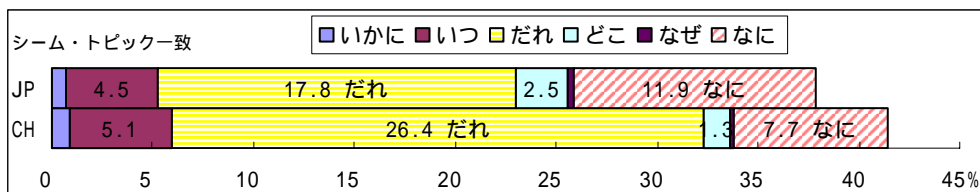


図 1・図 2・図 3 を合わせて見ると、日中ともトピックが「だれ」つまり、人間を中心に描くものが最も頻繁に現れる (一致：JP17.8% < CH26.4%、不一致：JP42.5 < CH44.3%)。その次

は「なに」つまり物事となっている（一致：JP11.9% > CH7.7%、不一致：JP13.6% > CH9.8%）。これは誰かの何らかのエピソードを取り上げるエピソード文の性質からみれば、必然的な結果である。意味役割の観点から見ても、時間・場所・原因などの状況要素が少なく、行為者・対象などの参加者が多いということにも当てはまる。

図 2 JP シーム・トピックの意味合い：不一致の場合

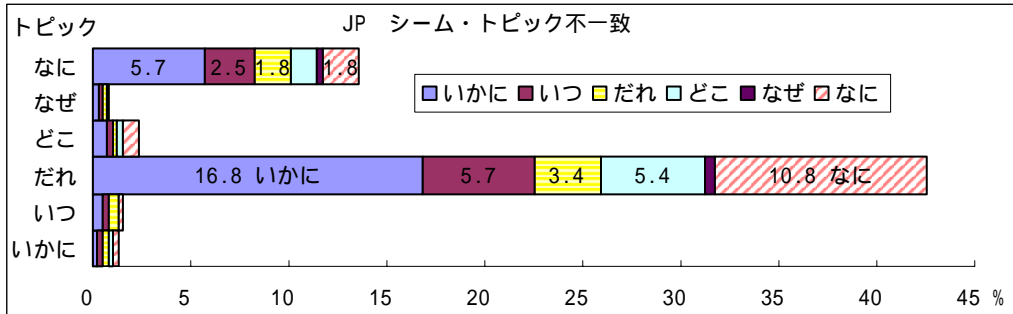
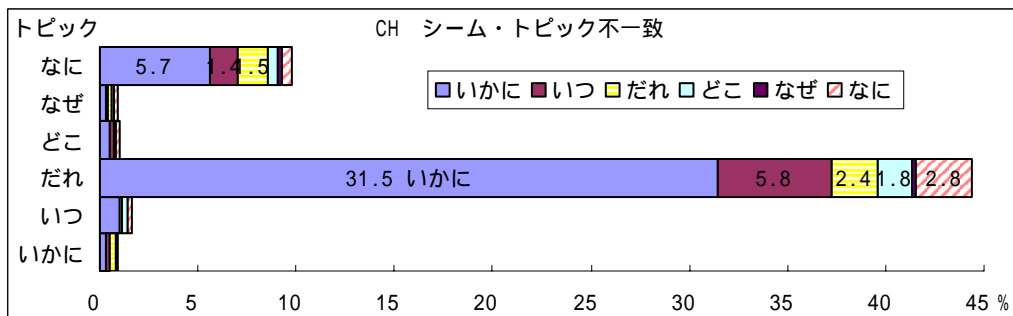


図 3 CH シーム・トピックの意味合い：不一致の場合



しかし、CH における「だれ」の多用と、JP における「なに」の目立つ存在は注目すべきである。(16) と (17) を照らし合わせれば、中国語は人間に関するトピックがより顕在化されやすいことが見て取れる。

- (16) 只見他〔形態トピック（「ケ」と略する）〕立刻關熄了引擎，
 就在此時〔ケ〕，綠燈突然亮起，他〔ケ〕趕忙轉動鑰匙，引擎〔ケ〕在咆哮了幾下之後，
 他〔ケの省略〕又恢復了平靜，【直訳： 彼がすぐエンジンを切り、（エンジンの）温度が下がるのを待つ。ちょうどその時、急に青信号になり、彼は慌てて鍵を回し、エンジンはちょっと上がった後、また元の静かさにもどった。/中 15 第 7 集】
- (17) （文章の書き出し）あの日、親子三人が車で実家を出るときの雨は〔ケ〕、郡部にさしかかる頃には大雪となりました。峠にさしかかる前にチェーン〔ケ〕をつけなければと、車のエンジン〔ケ〕を切り、チェーン〔ケ〕を巻き、
 車は〔ケ〕動きません。【日 2 第 5 集】

日中エピソード文における結束性と主題の展開（林）

一方、日本語では人間性が修飾節によって主節から捨象されることがある。(17)の「親子三人」は直接トピックとして登場することがなく、形態トピック「雨」を修飾する形によって後ろの～の話題となる「車」の話を導き出している。逆に、中国語の(18)はで放課後の天気を描き、その後、トピックが叙述者の「私」へ移り変わった。

(18) 這天下課後〔ケ〕, 天空下著討厭的「霧」雨。ø〔トピックの暗示：私〕站在雨中, ø〔トピックの暗示：私〕飢寒交迫的等 222 公車。【直訳： その日放課後、空(は)いやな^{縁起が悪い}梅雨 が降っていた。 雨の中に立っており、 空腹感と寒さを凌いで 222 号バスを待っていた。/中 3 第 2 集】

(19)(20)のような時間の設定及び登場人物の動きに関する場面でも、JPは修飾節、CHは主節が用いられている。(20)では「我(私)」が主節の形態トピックとして明示され、一方、JP(19)の「私」は修飾節に埋め込まれ、潜在化されてしまう¹³⁾。

(19) (文章の書き出し) 昨年の新年を迎えたばかりのまだ夜も明けぬ一月一日の四時ごろ〔ケ〕でした。私の運転で中一の娘を乗せて真っ暗な道を両親の待つ故郷(佐賀県)へ、ひた走りに走っていた時のこと〔ケ〕です。【日 25 第 2 集】

(20) (文章の書き出し) 寒冬〔ケ〕、 清晨〔ケ〕、 濃霧〔ケ〕、 時間〔ケ〕五点多、 我〔ケ〕從家中騎著機車要前往高雄上課、 這〔ケ〕是一個多年前的故事。【直訳： 寒い冬、 早朝、 深い霧、 時間は 5 時過ぎ、 私は授業のため、家からバイクに乗って高雄へ出かけようとしていた。 これは何年前の話だった。/中 11 第 6 集】

そして、トピックが「だれ」で、シームが「なに」である例の比率は、JPが10.8%、CHがわずかに2.8%となっている。人間についての叙述でも、比較的日本語は節頭に物事を描く要素を生起させる傾向がある。動作・状態を描写する要素が、トピックよりも節頭要素であるシームを担いやすいことは日中の共通点である。但し、中国語は日本語と比べてより節頭に動作や状態に関する要素を用いる傾向が窺える(「いかに」: JP24.2% < CH39.2%)。

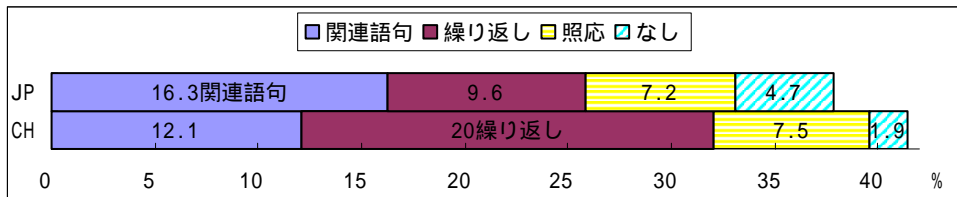
3-2 結束性

以下、シームとトピックとの相互関係を調査し、統語レベルにおける思考の具現化と思考の流れとの関係を明らかにする。

3-2-1 一致する場合の結束性

シーム・トピックの対応関係について、「一致する場合 対 不一致の場合」、JPは「37.8% : 62.2%」、CHは「41.4% : 58.6%」となっている。日中とも不一致の場合が過半数である。シームとトピックが一致する場合、図4のように、JPは「関連語句」、CHは「繰り返し」によって節を展開させやすい。本稿で扱う関連語句・繰り返し・照応・省略・暗示などの結束性が見出せない「(結束性)なし」は、新話題の提起と考えられ、比較的JPが多く占めている。

図 4 シームとトピックが一致する場合の結束性



「照応」は、日中とも近似する比率であり、主に「前方照応」が用いられている (JP 7.1%、CH 7.4%)。両者に占める「後方照応」の度合いはごくわずかだが、(21) (22) (23) のように、JP の「後方照応」は文章の最初の節に用いられることが注目すべきである (JP 7 例、CH 1 例)。形態としては、(24) (25) のように、CH は「這 (これ)」という指示詞が生起するのに対し、JP は長い修飾節「～こと」が目立つ。

(21) (文章の書き出し) 私が中学校に入学して間もないころのことです。【日 18 第 2 集】

(22) (文章の書き出し) 何年も前のことでした。【日 23 第 1 集】

(23) (文章の書き出し) 大学二年の夏休み、夜行列車で九州の実家へ帰省中の出来事です。【日 24 第 2 集】

(24) (文章の書き出し) 寒冬、清晨、濃霧、時間五点多、我從家中騎著機車要前往高雄上課，這是一個多年前的故事。【直訳：寒い冬、早朝、濃い霧、時間は 5 時過ぎ、私は授業のため、家からバイクに乗って高雄へ出かけようとしていた。これは何年前の話だった。/中 11 第 6 集】

(25) (文章の書き出し) 這是發生在多年前的事了，但卻在我幼小的心靈中留下了無法抹滅的記憶。【直訳：これは何年前に起きたことだが、私の幼い心に抹消できない記憶を残してしまった。/中 22 第 9 集】

3-2-2 一致しない場合の結束性

展開されている話題が節頭の言語形式と内容が食い違う場合、シームとトピックが一致しなくなる。図 5 と図 6 の縦軸はトピックの結束性を表し、比率はそれに対応するシームの結束性の分布を示している。トピックの結束性に関して、JP は「暗示」、CH は「省略」がトップに立っている。シーム・トピック不一致の場合、JP トピックの展開は文を超える話題の暗示が多く、CH トピックの展開は同一文内における話題の省略による例が目立つ。

一致しない場合、「関連語句」はトピックの展開において「暗示」と「省略」に譲る存在だが、シーム結束性の全体に占める割合は首位である。不一致の場合、日中両語は常にトピックを節の上で言語形式として明示しない傾向が強いが、シームの展開は関連する意味合いの言語形式に頼ることが多い。具体例は文末資料 JP-7・8・10・21、資料 CH-8・9・15 である。

図 5・図 6 においては、ある種のトピック結束性に、各種のシーム結束性が対応し、逆も同様である。各トピック結束性に占めるシーム結束性のばらつきもほぼ「関連語句 > なし > 繰り返し > 照応」の形となり、分布が類似している。節にはトピック結束性とシーム結束性が大抵同時に働き、たとえ、どちらか欠けても、片方が機能するということがみてとれる。

日中エピソード文における結束性と主題の展開（林）

また、トピック結束性「なし」の例は新話題の提起にあたるが、新しい話題でも節頭位置の要素によって、文章のほかの要素と関連性があるものに仕上げられている。シーム結束性「なし」に対応するトピックの結束性は、日中とも「暗示」「省略」が1、2位を競い合っている。節頭位置に言語形式による結束性が存在しなくても、トピックの結束性の制約が働き、文章をまとまりがあるものとして展開していく。トピック結束性とシーム結束性は緊密関係にあるものである。

図5 一致しない場合、JP トピックに対応するシームの結束性

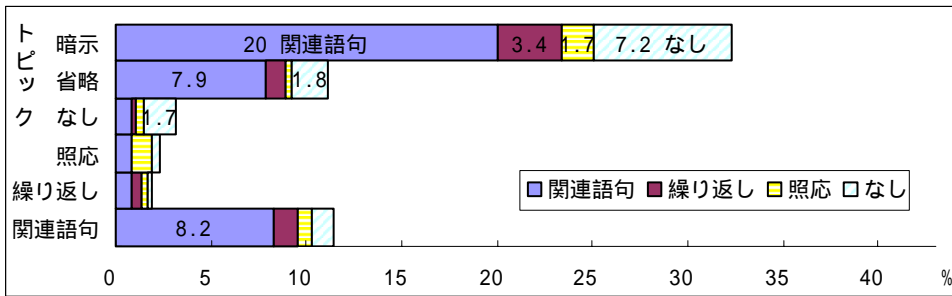
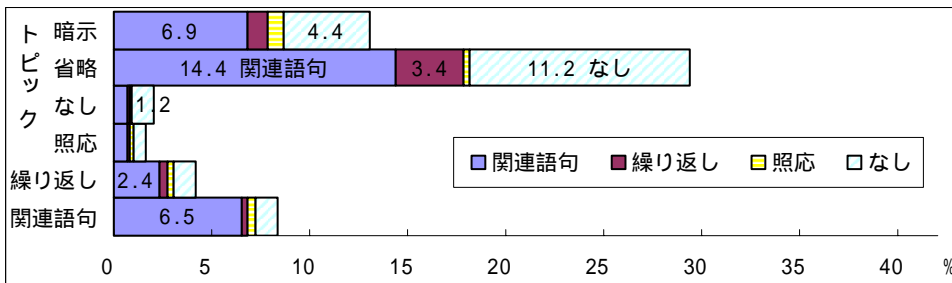
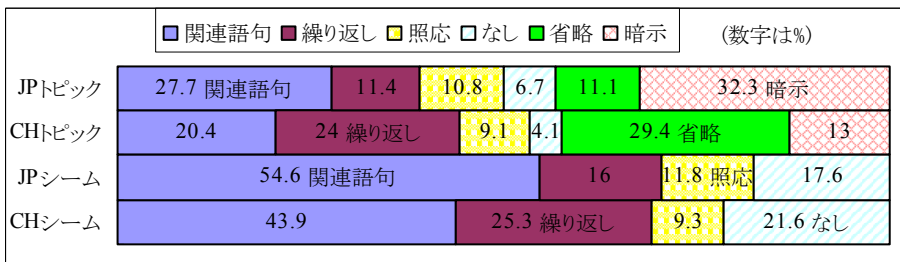


図6 一致しない場合、CH トピックに対応するシームの結束性



一致・不一致の対応関係を無視すれば、全体的にシームとトピック結束性の内訳は図7のようになる。

図7 シームとトピックの結束性



節の統語的な展開には、日中ともシーム結束性の「関連語句」が4割以上使用されている。

JP シームの結束性はより多い「関連語句」(JP > CH 10.7%) と「照応」(JP > CH 2.5%) が用いられ、CH シームの結束性は比較的「繰り返し」(CH > JP 9.3%) と「結束性なし」(CH > JP 4%) が多く現れている(具体例は文末資料 JP と資料 CH を参照)。

「関連語句」形態構造の上で、(26) (27) のように、CH は JP と比較してより多い「人称 + 主要部」の例が存在する。これは一つの特徴だと言える(シーム「関連語句」全体に占める比率: JP 2.8% < CH 4.8%。トピック「関連語句」全体に占める比率: JP 3% < CH 11%)。

(26) ...而我們唯一的代步工具只有單車。【...私たちの唯一のアシは自転車のみだった。/中 23 第 9 集】

(27) 我們倆全身繃緊的情緒才鬆懈下來,【私たち二人の全身の緊張がやっと解け、/中 23 第 9 集】

一方、話題の展開にあたり、JP はトピックの「暗示」、CH は形態トピックの「省略」が最も頻りに観察され、次は JP の「関連語句」、CH の「繰り返し」となっている。「不一致 対 一致」の比率と特徴を反映した順位と考えられる。シーム・トピック一致の場合、JP は類義語・コロケーションなどの言語手段、CH は繰り返しによって、話題を敷衍する傾向が見られる。

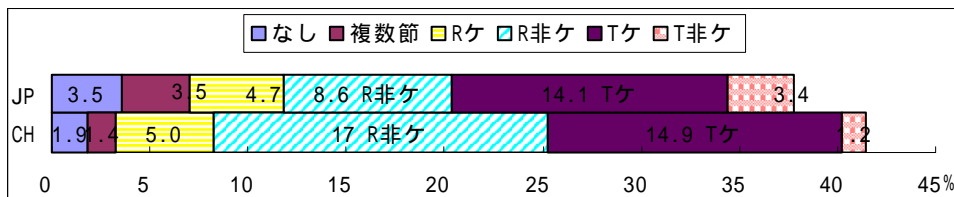
不一致の場合、CH の節は先行する節にある形態トピックによって文として統括されやすく、JP の文は暗示されているトピックによって他の文と一緒にまとめられる傾向がある。この話題が働く単位における日中の相違は、ある意味で日本語は主題主語卓立の言語、中国語は主題卓立の言語である学説を量的に実証したと言える。

3-3 展開基

3-3-1 一致する場合の展開基

図 8 のように、シームとトピックが一致する場合、「シーム且つ形態トピック」(T ケ) だったものから展開された結束性を担う要素の比率は日中ともほぼ同様である(具体例は資料 JP-2・5・17・18・26、CH-1・19・20)。一方、CH は JP と比べ、「題述且つ非形態トピック」(R 非ケ) だったものから展開された例が 10% 近く上回っている(具体例は資料 JP-14 と CH-10・17・24 である)。CH 題述の要素が、新しい話題として提起されやすいことが察知できる。

図 8 シームとトピックが一致する場合の展開基



T: シーム R: 題述 ケ: 形態トピック 非ケ: 非形態トピック なし: 展開基なし

3-3-2 一致しない場合の展開基

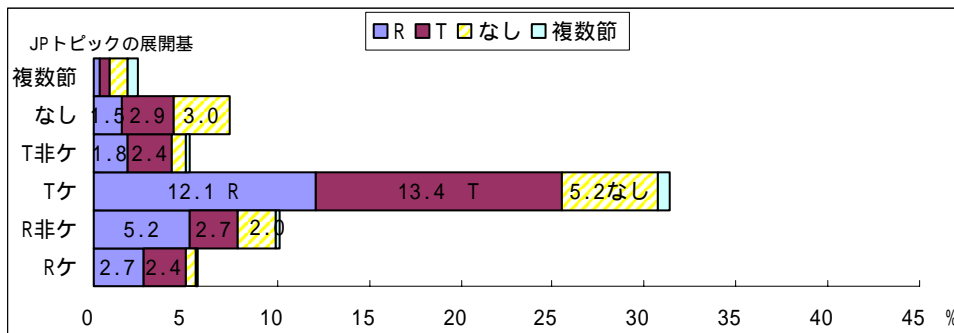
図 9・図 10 はシーム・トピックが不一致である場合、それぞれの展開基の分布が整理され

日中エピソード文における結束性と主題の展開（林）

たものである。縦軸の項目はトピックの展開基である。JP、CHのトピックは「Tケ（シーム且つ形態トピック）」だったものから展開された頻度が高く（資料 JP-3・4・15・23・24・25・27、資料 CH-2・6・21・22）、特に、JPは「Tケ/シーム展開基 T」（13.4%）、CHは「Tケ/シーム展開基 R」（14.1%）の節が最も頻繁に現れている。

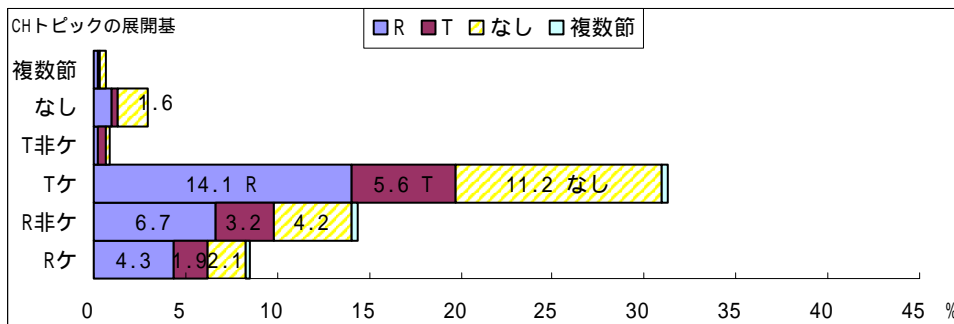
シームの展開基はJPの場合、シームと題述の割合がほぼ同様である（シームの例：資料 JP-15・23。題述の例：資料 JP-4・24・25・27）。一方、CHのシームは題述から展開した例が最も多く（資料 CH-21）、次は展開基がない「（結束性）なし」である（資料 CH-2・6・22）。

図9 JPシーム・トピック一致しない場合の展開基



T：シーム R：題述 ケ：形態トピック 非ケ：非形態トピック なし：展開基なし

図10 CHシーム・トピック一致しない場合の展開基



T：シーム R：題述 ケ：形態トピック 非ケ：非形態トピック なし：展開基なし

一致・不一致の特徴を統合すれば、JPシームはシーム（T41.7%）、CHシームは題述（R48.5%）から最も展開されやすい。日中トピックの展開基のベスト4はそれぞれ次のようになる。

JP Tケ 45.5% R非ケ 18.7% なし 10.9% Rケ 10.4%

CH Tケ 46.2% R非ケ 31.4% Rケ 13.4% なし 4.7%

日中のトピックは4割以上「シーム且つ形態トピック（Tケ）」から敷衍され、その次は、「題述且つ非形態トピック（R非ケ）」だった要素である。形態トピック（ケ）だった要素から展開

されてきたトピックは、日中とも 6 割近く占めている (JP55.9%、CH59.6%)。文章の展開には話題として提起された古い話題による推進力が強いと裏付けている。

JP の展開基「なし」が三位に立つのに対し、CH は 4 位となっており、比率の差も開きが大きい。日本語は、言及されなかった新しい話題の提起 (JP6.7% > CH4%) 及び、言及されても漠然としているトピック (JP4.2% > CH0.8%) の登場が若干多く観察されている。

さらに、言及された事柄が二たび話題として提起された例を調べると、特に一致する場合、このような活性化された話題は CH に多く見かける。一致する場合、活性化された話題の用例数及びその形態トピックの展開基は次のようになる。

JP 92 例：展開基が同じ文にある(6 例 6.5%)。展開基が異なる文にある (86 例 93.5%)

CH 338 例：展開基が同じ文にある(88 例 26%)。展開基が異なる文にある (250 例 74%)

CH の活性化された形態トピックは、同じ文の前の節から展開されたものが多く、中国語の文内部は比較的话题が変化しやすいものである (資料 CH-10・12)。これは、中国語の「S+V1+O1, V2+O2」の構造において、O1 が「V2+O2」のトピックを担うという文型に影響されたからである。

(28) 車子 (S = 形態トピック) 突然 (V1) 一个紧急煞车 (O1 = 「V2+O2」のトピック), 嚇醒了 (V2) 好夢正甜的我 (O2) ,【直訳： 車は突然急ブレーキ、 いい夢を見ている私をびっくりと目覚めさせた。/中4 第2集】

(29) 我便動了歪腦筋, 來到店裏, 就點了碗米粉 (O=S), 真的很好吃。【直訳： 私は悪知恵を抱いて、 店にやってきたら、 ビーフンを頼んで、 ほんとにおいしかった。/中2 第2集】

(29) 日本語訳の 「ほんとにおいしかった」は「そうしたら」「それは」などを付け加え、一つの文として独立させたほうが日本語らしいであろう。中国語は日本語と比べ、より幾つかの節がトピックによって文として連結されやすい。日本語の節も当然同じことが有りうるが、比較的トピックが明示されないまま、節が文として現れる傾向がある。日本語と中国語は、トピックが機能する統語的なレベルが異なるのである。

4 まとめ

日本語と中国語のエピソード文各 25 編に対して、結束性と主題の展開を考察してきた。主題を統語的な節頭要素 (シーム) と語用論的なトピックに区別し、両者の結束性 (繰り返し、関連語句、照応、省略、暗示、結束性なし) を分析した。シームの結束性とトピックの結束性は緊密関係にあることがわかった。

シームとトピックとの一致・不一致には、結束性の分布が異なった。全体的に言えば、シームの結束性は日中とも 4 割以上「関連語句」が用いられていたが、日中を比較した結果、JP は「関連語句」「照応」、CH は「繰り返し」と「結束性なし」が多用されていた。トピックの結

日中エピソード文における結束性と主題の展開（林）

束性に関して、上位 1、2 位は、JP では「暗示」「関連語句」、CH では「省略」と「繰り返し」であった。JP はトピックを言語形式として明示しないまま、もしくは関連語句によって話題を展開させていく傾向が見られた。一方、CH は話題を言語形式として提示した上で、省略したり、繰り返したりする例が頻繁に現れた。

これらの傾向は、何れも日中両語において、aboutness 主題が機能する統語的レベルに差があることを裏付けた。日本語は文、中国語は節が話題によって連結されやすいことが実証された。

資料 JP【日 14 第 1 集】

番号	例文	シームの展開基		シーム結束性	内容	トピックの展開基		トピックの結束性	話題の流れ	内容
1	愛車が 若葉の薫る浜街頭に出ると、 どこからともなく	なし	なし	文章始め	なに	なし	なし	なし	新話題	なに
2	オートバイが 出現し、	T	前節	関連語句	なに	Tケ	前節	関連語句	拡大	なに
3	私の車と 併走を始めました。	T	2 節	前方照応	なに	Tケ	前節	省略	同一	なに
4	一見、 暴走族タイプの少年 なので	R	前文 2 節	関連語句	いかに	Tケ	前文 2 節	関連語句	拡大	だれ
5	素知らぬ顔で いると、	T	前文 2 節	関連語句	いかに	Tケ	前文 2 節	関連語句	拡大	だれ
6	長い手で ドアをたたきます。	R	2 節	関連語句	いかに	Rケ	2 節	関連語句	拡大	だれ
7	無視する私に 何か叫びましたが、	T	前文 2 節	関連語句	だれ	Rケ	前文 3 節	暗示	同一	だれ
8	あきらめたらしく 視界から消えました。	R	前節	関連語句	いかに	Rケ	前文 4 節	暗示	同一	だれ
9	その時、 カーラジオの下のほうでは、 バリバリ音が していました。	R	前文前節	前方照応	いつ	T非ケ	3 文 6 節	関連語句	拡大	なに
10	{ { 雑音にしては異様な } と 思う } 間もなく 全体に広がり、	T	前文前節	関連語句	いつ	T非ケ	4 文 7 節	暗示	同一	なに
11	きな臭いにおいが 充満します。	なし	なし	なし	なに	T非ケ	4 文 7 節	暗示	同一	なに
12	急いで 道路わきに 停車する と、	T	前文前節	関連語句	いかに	Rケ	2 文 3 節	関連語句	拡大	なに

13	ヒューズの下から 発火。	R	前節	関連語句	どこ	Rケ	前節	関連語句	拡大	なに
14	炎は 車体の左を走り	R	前文前節	関連語句	なに	R非ケ	前文前節	関連語句	拡大	なに
15	息が つまりそう。	T	前節	関連語句	なに	Tケ	前節	省略	同一	なに
16	ガソリンも ある。	R	前文2節	関連語句	なに	Rケ	前文2節	関連語句	拡大	なに
17	爆発が 恐ろしい。	T	前文前節	関連語句	なに	Tケ	前文前節	関連語句	拡大	なに
18	{早く消さねば}と 思いますが	T	3文4節	関連語句	いかに	Tケ	3文4節	関連語句	活性化	なに
19	体が 動きません。	T	7文12節	関連語句	だれ	T非ケ	7文12節	関連語句	拡大	だれ
20	そこへ 先ほどの少年が 来てくれました。	R	前文前節	前方照応	いつ					
						Rケ	9文16節	繰り返し	活性化	だれ
21	消火器が ないので	T	2文3節	関連語句	なに	複数節	前の文章	暗示	活性化	だれ
22	二人は 服を脱いで		複数節	前の文章	前方照応	だれ	複数節	前の文章	前方照応	同一
23	火を 押さえ、	T	2節	関連語句	なに	Tケ	前節	省略	同一	だれ
24	たたき、	R	前節	関連語句	いかに	Tケ	2節	省略	同一	だれ
25	靴で 踏み、	R	3節	関連語句	いかに	Tケ	3節	省略	同一	だれ
26	手に 火傷を負いながら	T	4節	関連語句	どこ	Tケ	4節	関連語句	拡大	だれ
27	懸命に 消火しました。	R	前節	関連語句	いかに	Tケ	5節	省略	同一	だれ

資料 CH 【中 14 第 7 集】

番号	例文	シームの 展開基	シーム 結束性	内容	トピック の展開基	トピックの 結束性	話題の流れ	内容
1	我們倆 就在路上嘻嘻哈哈了起來，	T	2文6節	前方照応	だれ	Tケ	2文6節	前方照応
								直訳：私たち二人は途中から冗談をし始め
2	根本 無視於周遭人們上下打 量的眼光。	なし	なし	なし	いかに	Tケ	前節	省略
								まったく周囲の人々の怪しげな視線を無視していた。
3	就在這個時候，	複数節	前の文	前方照応	いつ			

日中エピソード文における結束性と主題の展開（林）

	一輛機車					R 非ケ	5 文 14 節	関連語句	拡大	なに
	疾駛而來	ちょうどその時、一台のバイクが疾走してきて								
4	與我們	T	前文 3 節	繰り返し	いかに	R ケ	前節	省略	同一	なに
	並行，	私たちと平行して								
5	他	R	2 節	前方照応	だれ	R ケ	2 節	前方照応	同一	だれ
	一直轉頭看著我與小芳，	彼は絶えず私と芳ちゃんを顧みていて								
6	搞得	なし	なし	なし	いかに	T ケ	前節	省略	同一	だれ
	{ 我倆終止八卦對話，警戒心頓起 }。	{ 私たちがくだらない会話を中止し、警戒心が生じた } ことをさせた。 そのせいで、私たちがくだらない会話を中止し、警戒心が生じた。								
	... (4 文 8 節、略)									
7	不由分說，	なし	なし	なし	いつ					
	小芳					R 非ケ	4 文 8 節	繰り返し	活性化	だれ
	加足馬力	言葉を出すひまもなく、芳ちゃんはすぐ馬力を上げ、								
8	往前	R	前節	関連語句	どこ	R ケ	前節	省略	同一	だれ
	飆，	前へ飛ばし								
9	想要甩開	R	前節	関連語句	いかに	R ケ	2 節	省略	同一	だれ
	這位怪叔叔，	この変なおじさんを振り切ろうとしたが、								
10	沒想到									
	他	R	前節	前方照応	だれ	R 非ケ	前節	前方照応	活性化	だれ
	在後面開始吼了...「小姐、小姐啊...」	なんと、彼は後ろで「お姉ちゃん、お姉ちゃん...」と叫びだした。								
11	這	節	前文前節	前方照応	なに	節	前文前節	前方照応	拡大	なに
	讓我和小芳更加緊張，	それは私と芳ちゃんにより神経を尖らせ、 それによって私と芳ちゃんが一層神経を尖らせ、								
12	直覺的	なし	なし	新	いかに	R 非ケ	前節	省略	活性化	だれ
	想，	直感的に思っ (た)								
13	的確是									
	碰到	なし	なし	なし	いかに	R 非ケ	2 節	省略	同一	だれ
	變態了，	確かに変態と出会っ (た)								
14	早知道									
	就不要穿	R	8 文 22 節	繰り返し	いかに	R 非ケ	3 節	省略	同一	だれ
	這麼短的裙子，	こんな短いスカートをはかなければよかったのに								
15	沒釣到	T	2 節	関連語句	いかに	R 非ケ	4 節	省略	同一	だれ
	帥哥	二枚目が釣れなかったくせに								
16	反而									
	釣到	T	前節	繰り返し	いかに	R 非ケ	5 節	省略	同一	だれ
	色情狂，	痴漢を釣ってしまった								
17	快！	R	2 文 9 節	関連語句	いかに	R 非ケ	2 文 9 節	関連語句	拡大	いかに
18	衝呀！	T	前文前節	関連語句	いかに	T ケ	前文前節	関連語句	同一	いかに
19	衝	T	前文前節	繰り返し	いかに	T ケ	前文前節	繰り返し	同一	いかに

	不到一分鐘，	17 早く！18 飛ばせ！19 一分も飛ばしていない（うちに）								
20	他	T	5文11節	繰り返し	だれ	Tケ	5文11節	繰り返し	活性化	だれ
	又如影隨形的隨侍在側。	彼はまた影のようにそばにくっ付いてきた。								
21	正在緊張的時候，	R	前文2節	関連語句	いつ					
	他					Tケ	前文前節	繰り返し	同一	だれ
	緩緩舉起了右手，	まさに神経を尖らせていたとき、彼はゆっくりと右手を挙げ、								
22	亮出	なし	なし	なし	いかに	Tケ	前節	省略	同一	だれ
	一個約莫手掌大小 黑色的長形物……	掌ぐらいの大きさの黒い長方形のものを提示した。								
23	咦，真是	23 あら、ほんまに見覚えがあるなあ！								
	眼熟！	なし	なし	なし	いかに	R非ケ	前文前節	暗示	活性化	なに
24	那、那、那	R	前文2節	前方照応	なに	R非ケ	前文2節	前方照応	同一	なに
	不是我的手機嗎？	24 あれ、あれ、あれは私の携帯じゃないの？								

< 注 >

- 1) 館岡 (1998:78) のアンケート調査によれば、評論文や論説文を読んでいるとき、日本語の文章構造と母国語の文章構造が「違うと感じる」と答えた人は、中国語母語話者が 41.8%、英語母語話者が 86.7%、韓国語母語話者が 0% となっている。
- 2) Halliday (1994: 334) は英語の文法における「テキスト形成的」領域を構成するものとして、結束性と主題構造のほかに、情報構造と情報焦点：旧情報と新情報も挙げている。ここでは結束性と主題構造を見ることにする。
- 3) 鈴木 (1983)、砂川 (2000) を参考されたい。
- 4) 「主題」(theme) という用語の由来は、龍城 (2000) を参照されたい。
- 5) 例えば、「対人関係の主題」は日本語となると、「～かもしれない」「～だろう」のように、文頭ではなく、文末に来ることがある。
- 6) 林 (2002) は、各文頭の構成要素が担う意味役割について、日中新聞記事の相違を論じた。
- 7) 小論は節のことを次のように考える。節は基本的に主語・述語・目的語から構成され、文そのもの、もしくはその一部を形成する。しかし、節は常に主語・述語・目的語を全部備えるというわけではない。文において他のまとまりと区切りをつけられるものであれば、節と認定する。
- 8) 林 (2002) もこの定義に基づき、文の最初の主節に対して話題的主题を分析した。
- 9) 佐久間 (1987) は市川 (1978) を踏まえ、文段の本質を「内容上のまとまりの相対的な区分」と考えている。常に顕在するとは限らないが、原則として、文段には「中心的内容 (小主題) を端的に述べている」中心文に相当する「主要部」が一つずつあるという。大小の文段はお互いに包摂関係にあり、「低次の文段の主題は文の主題に近く、高次の文段の主題は文章の主題に近いもの」とされている。
- 10) シームとトピックは Gundel (1985) の「Syntactic Topic」と「Pragmatic Topic」、Moya & Albentosa (2001) の「theme」と「topic」に相当する。しかし、Gundel (1985) は、統語論的話題は常に語用論的主题であるが、逆はそうではないと述べている。作者はシームが常にトピックだとは考えない。
- 11) 文章のトピックと最小文段トピックは、それぞれ甲斐 (1995) の「談話のトピック」と「SDの焦点 (話者の中心的事業)」、砂山 (2000) の「包括的な談話主題」と「局所的な談話主題」、Moya & Albentosa (2001) の「discourse topic」と「sentence topic」に相当する。
- 12) ハリデーのテキストの主題と対人関係の主題も話題の形成に直接関与しないため、割愛する。
- 13) JP 修飾節の多さは、JP 文中節の少なさにつながると思えるが、修飾節の研究は別の機会に譲る。

< 参考文献 >

市川孝 1978、『**国語教育** 文章論概説』教育出版

甲斐ますみ 1995、「省略のメカニズム 談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に」『岡山大学留学生センター紀要』No.3、pp1-18 岡山大学留学生センター

黒岩浩美 1994、「文章の結束性について 接続関係の分析からみた学習者の問題点」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』No.9 pp73-87 筑波大学留学生センター

佐久間まゆみ 1987「文段認定の一基準 (I) 提題表現の統括」『文芸言語研究 言語篇』No.11 pp88-135 筑波大学文芸言語学系

鈴木俊二 1983、「談話における主題の結束性」*Sophia Linguistica: working papers in linguistics* No.13, pp118-125, the Graduate School of Languages and Linguistics, Sophia University

砂川有里子 2000、「談話主題の階層性と表現形式」『文藝言語研究 言語篇』No.38、pp117-137 筑波大学文芸・言語学系

龍城正明 2000、「テーマ・レーマの解釈とスーパーテーマ プラーク言語学派から選択体系機能言語学へ」『言語研究における機能主義 誌上討論会』小泉保編 pp49-73 くろしお出版

館岡洋子 1998、「文章構造と読解 英語・韓国語・中国語を母語とする日本語学習者と日本語母語話者のテキスト評価と要約文の型」『アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要』No.21 pp67-83 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター

中西家栄子 1994、「上級学習者に対する作文指導」『言語と文化 No.1 共通自由科目紀要』pp172-185 独協大学外国語学部

永野賢 1986、『文章論総説』朝倉書店

畠弘巳 1980、「文とは何か——主題の省略とその働き」『日本語教育』No.41、pp198-208 日本教育学会

ハリデー & ハッサン 1976 安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉訳 1997、『テキストはどのように構成されるか 言語の結束性』ひつじ書房。原著: Halliday, M.A.K. and Hasan, Ruqaiya 1976 *Cohesion In English*, Longman

ハリデー, M.A.K. 1994、山口登・笈壽雄訳 2000、『機能文法概説 : ハリデー理論への誘い』くろしお出版。原書: Halliday, M.A.K. 1994, *An introduction to functional grammar*, Edward Arnold, New York

林雅芬 2002、「報道記事の描写における日中の相違 主語及び話題の主題の意味役割を中心に」『現代社会文化研究』No.23、pp219-236 新潟大学大学院現代社会文化研究科 紀要編集委員会

Gundel, Jeanette K. 1985, “‘Shared Knowledge’ and Topicality”, *Journal of Pragmatics* Vol.9, pp83-107, North-Holland

Moya, A. J. & Albentosa, J.I. 2001, “Points of Departure in News Items and Tourist Brochures: Choices of theme and topic”, *Text: Interdisciplinary Journal for the Study of Discourse* Vol.21 No.3, pp347-371, Walter de Gruyter, New York.

主指導教員（船城俊太郎教授）、副指導教員（大橋勝男教授・中西啓子教授）